

新潟県佐渡島の巨樹からみた日本人の樹木観

中藎 由佳里

第1章 はじめに

日本は四季折々の自然に恵まれ、自然を生活の中に取り入れているといわれている。それは日本人が、自然を人間と対立させるのではなく、人間を自然の一部であるとする自然観に基づいているからとされてきた。ではその自然観を背景に、日本人の樹木観はどのように形成されてきたのか。本稿は、より人間に身近な対象である樹木を取り上げて検証する。

1999年の日本の森林占有率は総面積の67%であるが、都市近郊では意識されるほど広域の森林は残されていない。東京都内の主な緑地は都市公園に限られ、かつての大名屋敷の庭園がその大部分を占める((株)プロジェクトオムニ 1997: 128)。一方都市部を除くと、まとまった樹木の残された所として鎮守の森や屋敷林があげられよう。

福田(1980)は、村を中心とする円を描くと村には鎮守の神がいて、その外側に野の神、その又外側に山の神がいるという模式図が描けると主張している。かつて鎮守の森はスギやシイ・カシ等の常緑の巨樹が神社を囲み、二重に守られた聖地であった。

屋敷林は、枝打ちをしたら薪に使い、タケは生活用具に用い、果樹やタケノコ・山菜を食べ、葉草を利用する、生活と密着した無駄のないものであった。持ち主にとっては、屋敷林そのものがその家の富と家格の象徴でもあった(砺波郷土資料館 1996: 26-29)。

これまでに、マタギや木地師を取り上げた研究の一部として樹木の利用を取り上げたものはあった。また、地域的な樹木利用に言及した研究は、学際的研究としてこれまでに数多く発表されている。地理学では、中島(1986)、富岡(1991)が伝統的環境利用の中で生業の一部として、樹木の利用を取り上げている。その他の分野でも、研究

の一部として樹木の利用が取り上げられている。例えば、湯川(1993)は山と人間活動の接点として山の幸の利用を、岡(1993)が自然を最大限利用した際の山の動植物の利用を取り上げている。篠原(1993, 1995)は、人間の経験によって体得した自然の生態に関する知識を細かく分析し、民俗自然誌として位置づけている。野本(1994)は、環境民俗学の一部として樹木を取り上げ、焼畑と同様に利用された樹木の再生力を高く評価している。

本稿では、日本人の樹木観を考察するための指標として巨樹を取り上げる。樹木は生物学的に、その樹種によりおよそ確定された寿命を持つ。しかし巨樹としてその寿命以上に生存している背景には、個々の環境条件として恵まれた経緯が認められる。多くは人為的事由によるものである。現在巨樹として残っている各々の条件を分析することにより、近年の日本人の巨樹からみた樹木観を考察する。なお、本稿でいう巨樹とは、環境庁(1991b: 5)で定義された「地上1.3 mの高さでの幹周が3 m以上もの」を「幹周が5 m以上もの」と読み変えた樹木を指すものとする。

巨樹に関する研究は、これまでに広範な分野において行われてきた。景観からは、松原他(1996)が、東京都区部の小学生および卒業生に対する影響について調査している。これに対して所有者の意識を調査したものに長友他(1995)がある。伊藤(1999)は、巨木は人間と自然との関係のなかで作られ出したものと分析する。また、山口(1995)は土木工学的立場から、巨木を通して自然環境と共存するための方法を模索している。民俗学の立場からは、野本(1990: 155-193, 1994)が巨樹の機能を分析し、巨樹を人と自然との共生関係の象徴であると明言している。

本稿では、地域として都道府県における巨樹本数が東京都に次ぐ新潟県の佐渡を選んだ(表1)。

表1 都道府県別巨樹の本数順位表

順位	都道府県名	本数
1	東京都	903
2	新潟県	431
3	静岡県	382
4	茨城県	374
5	長野県	374
6	岩手県	359
7	熊本県	300
8	石川県	285
9	岐阜県	264
10	大分県	248

(平岡忠夫氏の御教示により作成).

第2章 調査地の概要

佐渡は金北山(1,173 m)を主峰とする大佐渡山系と、大地山(646 m)を最高峰とする起伏の少ない小佐渡山系との二つの平行する島嶼からなっている。この南北の山地間が地殻の変動と土砂の堆積によって、国中平野が形成された(図1)。歴史は古く、古事記・日本書紀にも佐渡の記載が見られる。

佐渡の巨樹が現代まで残されてきた要因を考察するため、背景となる島の環境をみてる。自然環境と社会環境(鉱山・御林・一里塚)に分け、以下に概略を述べる。

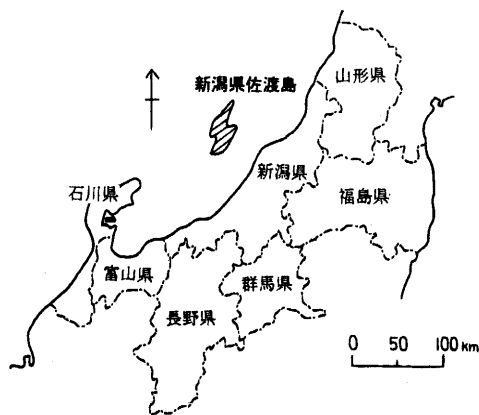


図1 調査地の位置

1. 自然環境

佐渡におけるアメダスによる気象観測4地点である、二ツ亀、相川、両津、羽茂の1965年から1998年までの月別最高気温と最低気温の平均値と月別降水量の平均値を東京と比較してみる(気象庁1965~1998, 新潟県1965~1998)。

気温は、東京と比較して佐渡では最高気温・最低気温ともに低いが、佐渡内での大きな違いは見られない(図2, 図3)。

次に降水量をみてる(図4)。年間総降水量の平均値は両津(1751 mm)・羽茂(1718 mm)・相川(1544 mm)・二ツ亀(1499 mm)・東京(1437 mm)の順になる(気象庁1965~1998, 新潟県1965~1998)。月別には、佐渡の各観測地点で降水量の変化に僅かな差違がみられるものの、佐渡と東京ではその変化に以下の特徴が認められる。東京は3月~6月の春から初夏と9月~10月の台風時に降水量が多く、佐渡は7月~8月の夏期と11月~2月の冬季に降水量が多い。

2. 社会環境

佐渡は古代より文化人や政治権力に関わる人々の流入の地であった。彼らを通して、当時の日本を代表する知識が伝播されてきたと推測される。近世の相川鉱山の発見により、佐渡奉行が置かれ幕府の直轄地となった。そのため、特色ある社会環境を生み出した。特に巨樹との関係が深いと思われる、鉱山・御林・一里塚を以下に取り上げる。

1) 鉱山

佐渡鉱山は幕府の財政を支える一端を担ったため、幕府きっての能吏が任命されることは多かった。それは逆に島民にとって、過酷な生活を強いられることとなった(北見1989)。

島外からの鉱山労働者の急激な流入により島の人口が増え、物資の流通が活発になった。鉱山の繁栄に伴い多量に固い性質を持つ樹木が必要とされ、同時に金銀の精錬及び役人たちのための炭も必要となった。そのため近世に入ってから、生活に困窮した島民により、鉱山の坑材や炭焼きのため島内の樹木が多量に切り出されるという現象が生じた。

2) 御林

御林とは江戸幕府直轄林を称する。御林の成立

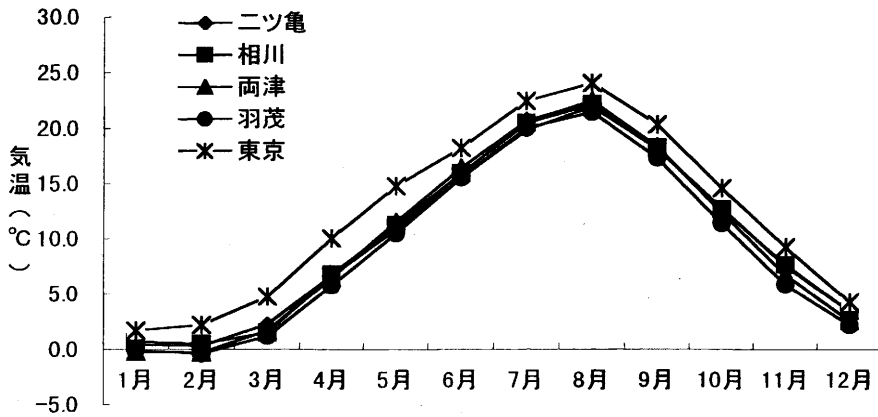


図2 佐渡と東京の月別最低気温の平均値（1965～1998年）の比較
（気象庁（1965-1998a, b）により作成）。

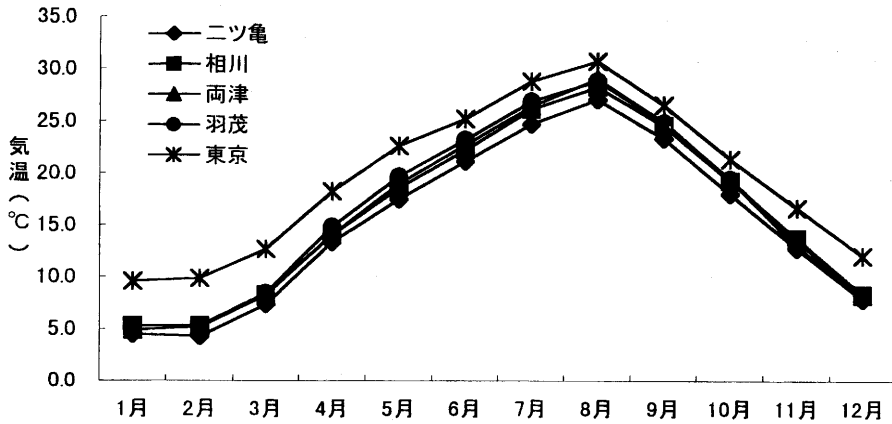


図3 佐渡と東京の月別最高気温の平均値（1965～1998年）の比較
（気象庁（1965-1998a, b）により作成）。

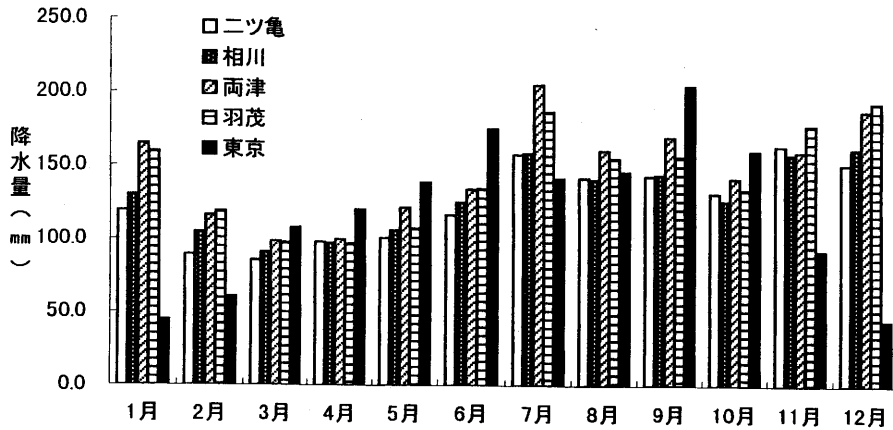


図4 佐渡と東京の月別降水量の平均値（1965～1998年）の比較
（気象庁（1965-1998a, b）により作成）。

は、1615（元和元）年に設定されたといわれる（大野郷土史編纂委員会編 1998: 233）。成立理由として、齊藤（1996）は鉾山備林として制度化されたもの、大野郷土史編纂委員会編（1998: 233）は鉾山、橋、溜池、役所などの用材の供給のためをあげている。また、佐渡には存在しないが將軍の鷹狩り用としての御巢鷹山として設けられたものもある（林野庁 1954: 9）。佐渡では樹木の材としての取入源というより、島内で用材供給として備えていた森林であった。

元禄検地によると、御林は樹種から松林、雑木林、柴山（芝山）、薪山、竹林と5つに大別された（新穂村誌編纂委員会 1976: 233）。また、御林はその構成樹種により、松御林（松杉の木の主たるもの）、松雑木御林（松杉と雑木の混交のもの）、雑木御林（雑木の主たるもの）の三種に分けられた（新穂村誌編纂委員会 1976: 240）。

両津市誌編纂委員会（1988: 95-97）によれば、

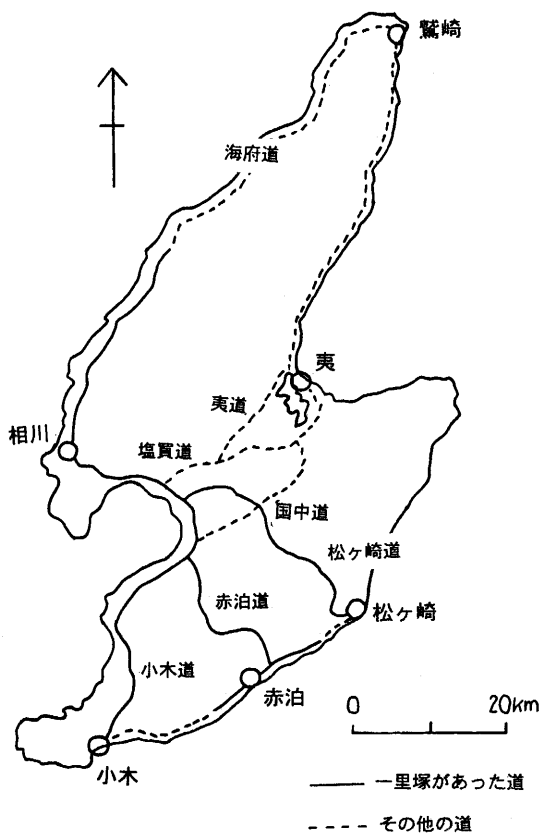


図5 佐渡と道と一里塚
（本間（1976）より引用して作成）。

御林の総数としては、元禄検地では佐渡には1842（天保13）年に279ヶ所の御林があった。その後明治に御林は官有地とされ、1970（明治3）年の調査では御林の本数は幹回り五尺（約151.5 m）以上が3654本であった。以後農地改革により、旧地主が生活のため山の木を伐って売り、伐採禁止を常識とした寺院・神社の境内の木も伐られた。1868（明治元）年維新政府は旧幕府の領有した林野を官有とし、その後徐々に民間に払い下げられた。

3) 一里塚

元来、佐渡では古道が山の稜線に沿ってつけられ、海岸線沿いの移動には船を用いることが多かった。しかし、江戸幕府により1604（慶長9）年に全国へ命ぜられた一里塚制度は、佐渡でも実施された（図5）。幕府は36町を一里としていたが、諸国毎にその間隔は数種存在した。佐渡では50町1里（約5.4 km）制であったが、次第に36町1里制（約3.9 km）へと移行された。1876（明治9）年の一里塚適宜廃毀令によって取り壊された所もある（本間 1976）。現在でも、石柱や石祠が残っていたり笹藪になっていたり、大木が残されていたりする所もあり、往事の生活と交通路との関わりが偲ばれる。

第3章 巨樹を生み出す背景

筆者は1996年9月に佐渡にて巨樹の調査及び聞き取りを行う機会を得た。その際の巨樹の基礎資料は、環境庁編（1991a: 15-42～15-44, 15-114～15-124）に基いている。この調査は、東京都立大学理学部地理学科の「地理学調査法Ⅲ」という野外実習の自由課題として筆者が2日間調査した（中基 1997）。本章では、巨樹が残されてきた背景について考察してみたい（図6, 表2）。

1) 神域を構成する

まず、一番多いのは14本あるスギである。その所有者は全て社寺である。スギは社寺に植えられる代表樹種であり、樹林が多数を占め、鎮守の森の一部である。聖なる区域ではむやみに殺生はされなかった。同時に、巨樹は建て直しの時に用いるための財産でもあった。

樹林ではない10a・10bは耕作地に囲まれては

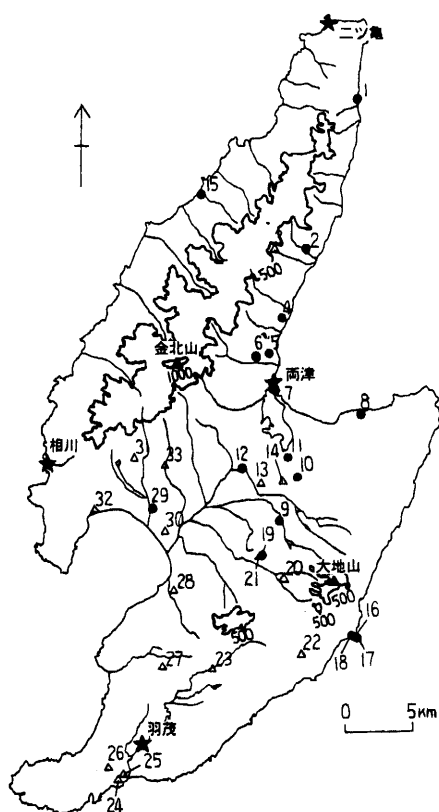


図6 佐渡における巨樹の位置図

(環境庁 (1991a), 国土地理院発行20万分の1地形図「相川」「長岡」を基に作成)。

いるが、スギの脇には低い土塚の名残が見られた。以前は社寺の一部をなしていたことが推測される。両木共に「しだれスギ」と呼ばれ、スギの崇りにより過去に病気や火災にあったことがあったといわれる。そのため、伐採や痛められることを免れ巨樹となりえた。他にも11は、「はらみスギ・安産スギ」と呼ばれ、子孫繁栄を祈願する人々に大事にされてきた。

次に社寺で大切にされる樹木に、イチヨウがある。9の「オオイチョウ」は、現在では個人の所有地にある。しかし清水寺の向かいであるため、かつては社寺の所領であった可能性があると持ち主が言っていた。戦前まで、イチヨウは銀杏をとるためにも大事にされていた。「オオイチョウ」は雄株であるが、清水寺には雌株がいくつかあるという。そのために残されたとも推測される。15のイチヨウは、観世音に助けられた女性が植えた

といういわれがある。所有が社寺であり樹林でもあるので、スギと同様に鎮守の森の一部であることが考えられる。二重の意味で大切にされてきたといえる。26のイチヨウは、同様に鎮守の森の一部であることが考えられる。

また樹種はマツで異なるが、17の「龍燈の松」は、龍が日蓮に上陸地に燈明があげてであると案内した所、という言い伝えを持つ。17の少し西に16の「おけやき」がある。日蓮宗のお題目である南無妙法蓮華経の道しるべから細い道を入った、民家の庭の奥の竹林にはいる斜面にある。どちらも日蓮宗との関わりが深く、残されたと見られる。

その他に社寺所有の巨樹に、18のケヤキ・20のイタヤカエデ・21のコウヤマキ・22のクロマツ・28のスダジイがある。これらは、社寺林特有の樹種ではないが、神域である鎮守の森に植えられたため伐採されず巨樹になったと推測される。

2) 緊急時の食用になる

近世まで、凶作や飢饉などに供えたり主食を補うものとして植えられた樹木があった。イチヨウ・カキ・カヤ・クリ・スダジイ・トチ・ヤマグワなどは、その代表である。イチヨウの9・15・26、カヤの2、スダジイの8・14、トチの3、ヤマグワの5が、あてはまる。

中でもカヤは食用にも油用に用いられたため、大事にされた。2「浄願寺のカヤ」は、600年ほど前に浄願寺があったときのカヤが、寺が移ってもそのまま残されているものである。社寺林の一部であったことが推定されるが、同時に飢饉用でもあった。現在は個人の畑の中にあり、海に向かって開けた川沿いの畑にあるカヤは海を航行する船の目印にもなったという。カヤの木の根本には小さな祠があり、所有者と話をする時に詣でるように諭された。この木にはタヌキやテンが住みついていたこともあり、今でもトビが所有者から昼食を投げてもらったりする。かつては神域の一部として奉られていた「浄妙寺のカヤ」は、今では友人のように処遇されている。トチに関しては、両津郷土博物館 (1997: 35) によると、かつて女の財産であり、備荒用の食べ物として個人山で育てたところもある。和木ではトチの実の口開け(林野などの共有地の採取解禁日)があった、という。3の存在はその名残であることが推定される。

表2 佐渡の巨樹

番号	所在の確認	所在地	字	所有者	樹種名	幹回り (cm)	周囲の 状況	信仰の 対象	独特の呼称	故事 伝承
1	●	両津市	北小浦	個人	ヤマザクラ	900	樹林	なし	北小浦の与六郎桜	なし
2	●	両津市	馬首	個人	カヤ	530	その他	なし	浄願寺のカヤ	あり
3	△	両津市	和木	個人	トチノキ	*770	樹林	なし	和木山のトチノキ林	あり
4	●	両津市	北五十里	社寺	スギ	950	樹林	不明	金峰神社の大杉	なし
5	●	両津市	野町	個人	ヤマグワ	360 & 310	耕地	なし	羽吉の大クワ	なし
6	●	両津市	羽黒山	社寺	スギ	620	樹林	あり	なし	なし
7	●	両津市	御旅所	公有	クロマツ	*600	建物群	あり	村雨の松	あり
8	●	両津市	両尾	個人	スダジイ	650	樹林	なし	なし	なし
9	●	新穂村	上大野	個人	イチヨウ	800	建物群	あり	オオイチョウ	あり
10a	●	新穂村	田野原	社寺	スギ	500 & 500	耕地	あり	しだれスギ	あり
10b	●	新穂村	田野原	社寺	スギ	520	耕地	あり	しだれスギ	あり
11	●	新穂村	湯上	社寺	スギ	680	樹林	あり	はらみスギ・安産杉	あり
12a	●	新穂村	鳥	社寺	スギ	枯死	樹林	なし	なし	なし
12b	●	新穂村	鳥	社寺	スギ	枯死	樹林	なし	なし	なし
13a	△	新穂村	長畝	社寺	スギ	760	樹林	なし	なし	なし
13b	△	新穂村	長畝	社寺	スギ	695	樹林	あり	なし	なし
14	△	新穂村	正明寺	個人	スダジイ	731	耕地	なし	なし	なし
15	●	相川町	石名	社寺	イチヨウ	550	樹林	なし	なし	あり
16	●	畑野町	松ヶ崎	不明	ケヤキ	670	樹林	あり	おげやき	不明
17	●	畑野町	松ヶ崎	社寺	クロマツ	枯死	樹林	あり	龍燈の松	不明
18	●	畑野町	松ヶ崎	社寺	ケヤキ	*510	樹林	不明	なし	不明
19	△	畑野町	小倉	社寺	スギ	*626	樹林	なし	長谷の三本杉	不明
20	△	畑野町	小倉	社寺	イタヤカエデ	*500	樹林	不明	なし	なし
21	△	畑野町	小倉	社寺	コウヤマキ	*550	樹林	不明	長谷の高野マキ	不明
22	△	畑野町	丸山	社寺	クロマツ	*610	樹林	あり	ユスリンマツ	不明
23	△	赤泊村	下川茂	社寺	スギ	*521	耕地	あり	川茂大杉	不明
24	△	羽茂町	大橋	個人	タブノキ	*500	樹林	なし	岩野のタブノキ	なし
26	△	小木町	小比叡	社寺	イチヨウ	*540	樹林	あり	なし	なし
27	△	真野町	下黒山	社寺	スギ	*567	樹林	なし	なし	なし
28	△	真野町	小川内	社寺	スダジイ	*510	樹林	なし	なし	あり
29	●	佐和田町	市野沢	社寺	スギ	*680	公園	あり	三光の松	あり
30	△	佐和田町	八幡	国	アカマツ	*530	公園	あり	御腰掛けの松	あり
31	△	佐和田町	真光寺	公有	ブナ	*540	道路	なり	仏峠のブナ大樹	なし
32	△	佐和田町	沢根	個人	タブノキ	*620	樹林	あり	なし	あり
33	△	金井町	平清水	社寺	スギ	*670	樹林	あり	毘沙門天の百足杉	あり

注：1) 図番号は図6上の位置を表す。

2) ●は場所の特定ができたもの、△は場所の特定ができなかったものを示す。

3) 幹周りは全て実測値（但し、*は環境庁編（1991a）である。

4) ●5と●10aは測定位置で2本に枝分かれしていた。

（環境庁編（1991a）、実地調査（1996）により作成）。

8のスタジイの所有者は、戦前までは「米一升、シイ一升」といわれていた、と言っていた。この辺りでは、シイを所有するのは当たり前であったそうである。重要な飢饉の助けとして残されたといえる。

3) 「御林」の制度の中で残された

前章で述べた徳川幕府の直轄領である「御林」の中の木は、住民の利用が許されなかった。そのために巨樹として残ったのは、6である。羽黒山は江戸末期までは修験の山であり（本間 1976）、羽黒御林として用材供給地の役を担っていた（斉藤 1996）。

また、8のスタジイは現在は個人の所有地にあるが、聞き取りにより8は御林と隣接していたことがわかった。かつては「御林」の領地内であった可能性がある。

明治期以降に民間に払い下げられた御林は、より価値の高い樹木は貴重な財産として残され、搬出に不便な樹木はそのまま残された。このような背景が、現在の巨樹を生み出す要因となった。

4) 生活の一部として扱われていた

1の「北小浦の与六郎サクラ」は、海岸沿いの道から山への道沿いの斜面にあり、海岸通りからも確認することができる。日頃から集落の人たちは掃除をし、春には祭りが開催されるという。このサクラは集落の年中行事の一つを担っていた。

その他、32のタブを除き、7のクロマツは「村雨の松」、24のタブは「岩野のタブノキ」、25のアカマツは「大上の大松」、30のアカマツは「御腰掛けの松」、31のブナは「仏峠のブナ大樹」などそれぞれ特有の呼称を持ち、地元の人たちに意識されてきたことがわかる。

5) 一里塚のある道沿いにあった

近世に設けられた一里塚には、旅の道中の安全を願って祠や地蔵が奉られているところが多い。また、一里塚は休息の場でもあった。木陰を作るために植栽された樹木が巨樹や小さな林となり、人為的に残されてきた所である。図6の巨樹の位置図と図5の一里塚のあった道とで、重なる部分が多い事が確認できる。一里塚があった道は近世でも現在でも、主要道路である。しかし巨樹は人里離れた山奥ではなく、より人との関わりの深い

所に残されている事が多い。

第4章 佐渡の人々と樹木との関わり

本章では、佐渡では樹木と人々の生活がどのような関わりを持ってきたのかを考察する。

戦前の新潟県の風景を代表するものとして、刈り取られた稲をかける「はざぎ」があげられる。佐渡でも、「はざぎ」と呼ばれるタモノキやハンノキが田のあぜ道に植えられていた。「はざぎ」には丸太やタケや縄が結びつけられて用いられたが、時代と共に「はざぎ」の代わりにガードレールも用いられるようになった。また、強風にさらされる家は「まがき」によって、木を組み藁を縛り付けて家を囲って保護した。

佐渡金山では主としてクリ・ナラを坑材として用い、佐渡内のクリやナラはほとんど伐採された。そのため、クリやナラの巨樹は残っていない。また、木材は坑材として利用されたが、鉱山の精錬用木炭にも多量に使われた。加えて、奉行所や役人たちの住宅用の木炭が必要となり、これらの木炭の多くは海府の村々で焼かれた。大佐渡の山々が、大量の木炭焼きのために緑を失うようになったのは、1691（元禄4）年ころである。島外炭が高値となり、金山再建のための合理化を進め始めていた奉行所は、百姓の炭焼きを自由にして、島内山の木炭の自給化に重点を置いた（両津市誌編集委員会 1987: 782）。鍛冶用炭は軟質の雑木を利用したため、農民の貴重な副収入として金山近郊のみならず島内の樹木は切られていったと推測できる。

新穂村には村の山手及び中間地帯では宅地の境に杉を植える習慣が古くからあり、家などの建築用、財政不如意の時被災時等重要な位置を占めた。特に本数の多い場合は屋敷林ともいった。幕府もこれを奨励し山の木同様自由に伐採することは許さなかった（新穂村誌編集委員会 1976: 274）。

以上のように、佐渡では元来生活と樹木は近い存在だった。それは表3からも、確認できる。37種6属にわたる樹木の利用は広範であったとはいいがたいが、島内の限られた資源を有効に利用していたことは認められる。特に船に関する物と油に利用された樹木が多い。斉藤（1993）は、佐渡では積極的に油を製造・販売していたことを確認している。油用の樹種としては、アブラギリ・イ

表3 佐渡における木の利用

(和名)	樹種名		利用部位	利用の目的	
	(方名)	(学名)		江戸時代	戦前
アオダモ	タモノキ	<i>Fraxinus lanuginosa</i>	樹	稲干し	
アスナロ	アテビ・ヒノキアスナロ	<i>Thuopsis dolabrata</i>	材	船材・高級建築用材	
アブラギリ		<i>Aleurites cordata</i>	実	燈油・毒・塗料	
イタヤカエデ	イタヤ	<i>Acer mono</i>	材	柄(鋳用)・天秤	
イヌガヤ		<i>Cephalotaxus drupacea</i>	実	寒地燈油	
イヌザクラ	クサカンバ	<i>Prunus buergeriana</i>	材	杵	
イヌザンショウ	ホソキ	<i>Fagara mantcurica</i>	実	燈油・精油	
ウルシ		<i>Rhus verniciflua</i>	実	蠟燭・燈油	
			樹液	仏像・汁器・船用接着剤	
エゴノキ	ヅサ	<i>Styrax japonica</i>	実	燈油	
カキ		<i>Diospyros kaki</i>	実	食用	食用
カツラ		<i>Cercidiphyllum japonicum</i>	材	鉢	土産用鉢
カマツカ	ウシゴロシ	<i>Pourthiaea villosa</i>	材	牛の鼻輪・鉦や鎌の柄	
カヤ		<i>Torreya nucifera</i>	実	食用・薬用油	
キリ		<i>Paulownia tomentosa</i>	材	釣り具の柄・タンス	
クロモジ	クロモンジャ	<i>Benzoin umbellatum</i>	材	爪楊枝	
クマヤナギ	トラフチ	<i>Berberis racemosa</i>	材	かんじき	
クリ		<i>Castanea crenata</i>	材	杵子・屋根材・鉢・坑材	土産用鉢
			実	食用	食用
ケヤキ		<i>Zelkova serrata</i>	材	和船・鉢	土産用鉢
シナノキ		<i>Tilia japonica</i>	樹皮	織物・漁網・船用ロープ・蚊帳	
			材	鉢	土産用鉢
シラキ		<i>Sapinum japonicum</i>	実	燈油・塗料	
シロダモ	ツブ・ウラジロ	<i>Listsea glauca</i>	実	油	
スギ		<i>Cryptomeria japonica</i>	材	和船・蔵の用材・樋・橋・家材・屋根・タライ船・櫓・防風林	タライ舟
スギ		<i>Cryptomeria japonica</i>	樹	防風林・防砂林・境界木	
タブノキ		<i>Machilus thunbergii</i>	実	蠟燭の原料	
チャ		<i>Thea sinensis</i>	実	燈油・蠟燭の原料	
ツツラフジ	トドラフジ	<i>Sinomenium actum</i>	材	かんじき	
トチ		<i>Aesculus turbinata</i>	材	鉢	土産用鉢・杵子
			実	食用	
ハイイヌガヤ	ヒョウビ	<i>Cephalotaxus harringtonia</i>	実	油	油
ハゼノキ	ロウノキ	<i>Rhus succedanea</i>		蠟燭・燈油	
ハナヒリノキ	ハナヒゴウ	<i>Leucothoe grayana</i>	樹液	ミミズ退治	
ハンノキ		<i>Alnus japonica</i>	樹	稲干し	
ヒノキ		<i>Chamaecyparis obtusa</i>	樹皮		弁当箱
フジ		<i>Wistarua floribunda</i>	繊維	織物	
ヤブツバキ	ヤマソ	<i>Camellia japonica</i>	繊維	織物(下着・仕事着)・蚊帳	
			実	燈油・食用油・髪油	食用油
ヤマボウシ	イツキ	<i>Cornus kousa</i>	材	掛矢	
			実	食用	
ユズリハ		<i>Daphniphyllum macropodum</i>	枝	正月の飾り	
リョウブ	ドウボウ	<i>Clethra barbinervis</i>	葉	糧葉	
レンゲツツジ	ヤマツツジ	<i>Rhododendron japonicum</i>	枝	花祭りに竹竿に差し立てる	
コナラ属		<i>Quercus</i>	樹	一里塚	
			材	坑材・炭	椀・皿
シイ属		<i>Shiia</i>	樹	一里塚	
シュロ属		<i>Trachycarpus</i>	葉柄	鯉叩き・太鼓のばち・縄(船用)・帆綱・把手(タライ船用)	
			皮	箕・笠	
マダケ属		<i>Phyllostachys</i>	樹	紐(はざき用)・工芸品・ザル・カゴ・樽のたが・笠・箕・杵子の柄・篩・藁屋根の道具・釣り具・めけい(炭俵用漏斗)	工芸品
			幼木	食用	食用
マツ属		<i>Pinus</i>	材	蔵の用材・船材・橋・門松	
			根	油	
ヤナギ属		<i>Salix</i>	材	めけい(炭俵用漏斗)	土産用鉢

注：利用の部位は以下の分類基準による。

樹：木全体として利用する。材：木を材木に加工して利用する。幼木：木の幼木を利用する。樹皮：幹の表面を剥いだ皮を利用する。繊維：木の繊維を取り出し利用する。樹液：木の樹液を利用する。葉：葉を利用する。枝：枝を利用する。葉柄：葉柄を利用する。

(上原(1977a, 1977b), 大野郷土史編纂委員改編(1998), 九学会連合佐渡調査委員会(1989), 斉藤(1993), 佐竹(1989), 佐渡地理研究会(1976), 林(1985), 牧野(1982), 両津市郷土博物館(1997)より作成)。

ヌガヤ・イヌザンショウ・ウルシ・エゴノキ・カヤ・シラキ・シロダモ・チャ・ハイヌガヤ・ハゼノキ・ヤブツバキ・マツと12種1属にも及ぶ。食用にされた樹種も多い。樹木の性質を丹念に観察し、利用していたことが推測される。

しかし、既に戦前には江戸期のように活発な樹木の利用は収まっている。近世から大正にかけて、生活が自然依存の自給自足型から流通経済依存型へと大きく変化したことを物語っている。表の他にも、年中行事に各種の樹木の部位が用いられており、この方面での今後の研究が望まれる。

第5章 佐渡の事例を通してみた日本人の樹木観

これまでみてきたように、佐渡において巨樹を生んだ様々な背景には、人々の樹木を大切にす意識があった。ただ、巨樹は必ずしも大切にされてきたという理由だけで全てが残されてきたのではない。伐採にしても搬出するのに不便であったり、樹木の形状が良くないために残され巨樹となった樹木もある。

ここで、巨樹を生み出す可能性の要因を模式図に描いてみる(図7)。一番初めに、自然環境によって物理的に巨樹となり得るかどうかが決まる。陽当たり、降水量、気温、土壌成分、風当たり等は、場所によってしかも個別にその環境の良し悪しがある。次に、人との精神的な関わりがあげられる。関わりが深くなるにつれ、外見の美醜はその次の問題となる。鎮守の森や屋敷林がこの代表であろう。三番目に、搬出がしやすいかどうか。この条件は、反比例の関係で巨樹を生み出すことがある。時々山奥の思いもかけないところで、巨樹が見つかることがある。利用せずにおいた樹木がいつのまにか巨樹に育ち、偶然に発見されたりする。その次に、経済的価値があげられる。樹形が直立していれば、材としての価値は高くなる。但し、経済的価値を高めるために長期間のその樹木の成長を待つことも、よく行われる。

このように巨樹を生み出す可能性の要因から考えると、日本人は必ずしも樹木を慈しみ育てただけではないことがわかる。各種の要因のバランスをとることによって、樹木を捉えている。従来のように、身近な自然としての樹木観のみを取り上げるのは早急であるといえよう。今後は日本

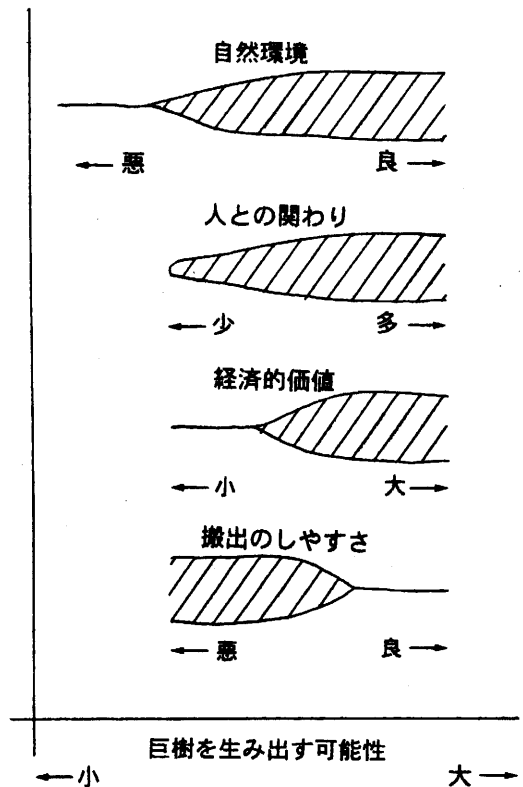


図7 巨樹を生み出す可能性の要因模式図

人の森林観や自然観の中で、より深く樹木観を考察していきたい。

[謝辞]

長年にわたる個別の巨樹調査に基づく資料を快く提供して下さいました「巨樹の会」の皆様にお礼を申し上げます。本稿の動機を与えてくださり、細かなデータを御教示・御指導下さった平岡忠夫先生に深く感謝を致します。

佐渡で聞き取りの調査に快く応じていただいた地元の方々には、大変お世話になりました。また、聞き取り調査に同行していただいた現専修大学高岡貞夫先生と恩田真理子さんに、お礼を致します。本論文を作成するきっかけとなった巡検を企画立案され全体的な指導を頂いた都立大学理学部岡秀一先生と、都立大学理学部堀信行先生には多方面にわたるご助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

- 伊藤廣之 1999. まちの景観—大阪の都市開発と巨木. 『講座人間と環境第4巻 景観の創造—民俗学からのアプローチ』18-37. 昭和堂.
- 上原敬二 1977a. 『樹木大図説Ⅱ』有明書房.
- 上原敬二 1977b. 『樹木大図説Ⅲ』有明書房.
- 大野郷土史編纂委員会編 1998. 『山と川と大地 佐渡大野史』大野区.
- 岡恵介 1993. 季節と動植物. 『講座日本の民俗学4 環境の民俗』181-194. 雄山閣.
- 環境庁編 1991a. 『日本の巨樹・巨木林 甲信越・北陸版』大蔵省印刷局.
- 環境庁編 1991b. 『日本の巨樹・巨木林 (全国版)』大蔵省印刷局.
- 気象庁 1945-1998a. 『気象庁要覧』気象庁.
- 気象庁 1945-1998b. 『新潟県気象月報』気象庁.
- 北見俊夫 1989. 近世の佐渡. 『佐渡 自然・文化・社会』104-123. 平凡社.
- 九学会連合佐渡調査委員会 1989. 『佐渡 自然・文化・社会』平凡社.
- 国土地理院 1996. 20万分の一地図『相川』国土地理院.
- 国土地理院 1996. 20万分の一地図『長岡』国土地理院.
- 斉藤昌宏 1993. 近世佐渡の油料植物. 森林文化研究 10: 113-131.
- 斉藤昌宏 1996. 佐渡の御林 近世文書に見る管理と利用. 森林科学 18: 7-14.
- 佐竹義輔他編 1989. 『日本の野生植物 木本Ⅱ』平凡社.
- 佐渡地理研究会 1976. 『佐渡誌—島の風土とくらし—』佐渡誌刊行会.
- 篠原徹 1993. 植生と民俗. 『講座日本の民俗学4 環境の民俗』267-285. 雄山閣.
- 篠原徹 1995. 『日本歴史民俗叢書 海と山の民俗自然誌』吉川弘文館.
- 富岡政治 1991. 近世中津川村における生業と林野利用—土地利用から見た生活領域—. 史苑 51: 41-80.
- 中島弘二 1986. 背振山麓東背振村における伝統的環境利用—主体的環境区分をとおして—. 人文地理 38: 41-55.
- 中葦由佳里 1997. 新潟県佐渡島における巨樹と人間生活の関わり. 『地理学調査法Ⅲ in 佐渡報告』38-50. 東京都立大学理学部地理学科.
- 長友大幸他 1995. 住居系市街地における巨樹の保護に関わる所有者意識に関する研究. ランドスケープ研究 58: 265-268.
- 砺波郷土資料館 1996. 『砺波平野の屋敷林—散居に暮らした人々の自然との共生の証—』砺波散村地域研究所.
- 新穂村誌編纂委員会 1976. 『新穂村誌』新潟県佐渡郡新穂村.
- 野本寛一 1990. 『神々の風景』白水社.
- 野本寛一 1994. 再生の民俗. 『共生のフォークロア 民俗の環境思想』254-269. 青土社.
- 林弥栄 1985. 『原色樹木大図鑑』北隆館.
- 福田アジオ 1980. 村落領域論. 武蔵大学人文学会雑誌 12: 217-247.
- (株) プロジェクトオムニ 1997. 『第47回全国植樹記念誌 東京の森』東京都労働企画局.
- 本間三次 1976. 佐渡・一里塚考. 『佐渡誌—島の風土とくらし—』208-224. 佐渡誌刊行会.
- 牧野富太郎 1982. 『原色牧野植物大図鑑』北隆館.
- 松原秀也他 1996. 校庭の巨樹に関わる小学生および卒業生の意識に関する基礎的研究. ランドスケープ研究 59: 81-84.
- 山口晴幸 1995. 樹齢7200年縄文杉に見た生命の神秘—長寿の秘訣は腹八分目か—. 土木学会誌 6: 86-89.
- 湯川洋司 1993. 山の民俗. 『講座日本の民俗学4 環境の民俗』65-79. 雄山閣.
- 両津市郷土博物館 1997. 『海府の研究 復刻』高志書院.
- 両津市誌編纂委員会 1987. 『両津市誌 上巻』両津市役所.
- 両津市誌編纂委員会 1988. 『両津市誌 下巻』両津市役所.
- 林野庁 1954. 『徳川時代に於ける林野制度の大要』(財) 林野共済会.